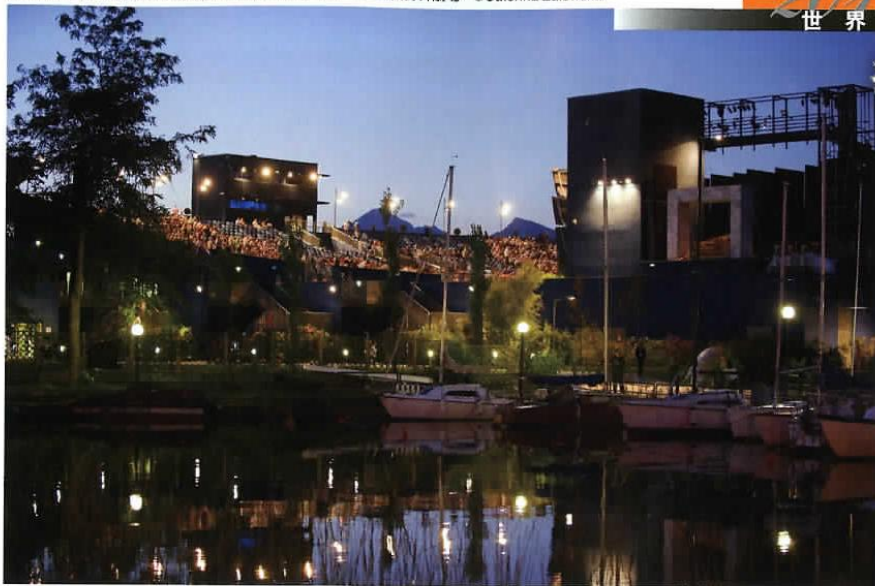


夜の帳が下り、午後9時15分の開幕を待つトッレ・デル・ラーゴ大野外劇場 ©Caterina Zalewska



2010 世界の音楽祭



文 堂満尚樹 ©音楽ジャーナリスト  
text by Naoki Domitsu

# トッレ・デル・ラーゴ プッチーニ・フェスティバル

プッチーニ・フェスティバルのオフィシャル・プログラムに、はじめて日本人指揮者が登場  
吉田裕史指揮する「トゥーランドット」がトスカーナの夜空に響きわたる

イタリア人観客はもちろん、欧州や米国、そして、近年のアジアからは日韓のみならず中国からも、プッチーニの足跡と音楽を求めて当地を訪れる聴衆が増えているという。

このトッレ・デル・ラーゴで56回目を迎えるフェスティバルが、7月16日、「西部の娘」により開幕して、ダニエラ・デッシーとファビオ・アルミリアートのコンビが主役を飾った。その他、日本人彫刻家の安田侃が舞台美術を担当している「蝶々夫人」、マリア・クレギーナがタイトルロールで登場する「トスカ」、ボリス・イ・パレエ団の引越し公演としてプログラムに組み入れられたプロコフィエフの「ロメオとジュリエット」(パレエ)、そして、唯一の単独プログラムとして、ルネ・フレミングのリサイタルがフェスティバル・オーケストラの伴奏で行なわれている。

イタリアを代表する作曲家、ジャコモ・プッチーニ150回目の生誕を記念して2008年6月にリニエリアル・オーブレンした野外劇場。北部トスカーナ、ティレニア海からさほど遠くないマツサチューッコーリ湖のほとりは木々の緑が色濃く眩しい、作曲家のこよなく愛した自然が今もなおそのままに残る。約30年間に過ぎた湖畔の別邸が今では博物館となり、新しい劇場はその場所からブルーの巨大な姿を見つけることができる。

## プッチーニのための音楽祭



イタリア、夏の4大音楽祭のひとつと言われながら数年前までは、実際、レベルの高い興行にはほど遠かったように憶えている。舞台そのものが粗雑であり、音響や音楽を構築するすべてのバランスと演奏者のレベルが十分ではなかった。音楽祭の開催地として孤立して(他の音楽祭ルートからは外れて)いたことも客の流れをつかみきれなかった理由のひとつである。

## 功を奏してきた2人の監督の改革

「トゥーランドット」を指揮した吉田裕史 ©Caterina Zalewska

しかし、劇場総監督にフランコ・モレッティが就き、ブッチーニ音楽祭としての基本理念が明確に打ち出されてからの夏の催しは格段に進歩した。オペ・メソンの入れ替えと補充を繰り返し、とくに2009年に行われたオーディションにより、かなりパートの刷新を図っている。

普段着のオーケストラにドレスコードを施し、緊張感を欠いたアンサンブルを一流オーケストラに育てようと企てたわけであるが、それについては、音楽



吉田裕史が指揮した「トゥーランドット」の舞台から ©Caterina Zaleswska

《公演期間》7月16日～8月22日

- 主な演目
- 「西部の娘」=プレミエ (7月16、23日、8月7日)  
 出演:ダニエラ・デッシェ、ファビオ・アルミアート、カルロス・アルマガエール、他  
 指揮:アルベルト・ヴェロネージ  
 演出:キルステン・ハルムス
- 「蝶々夫人」(7月17、25日、8月1、14、22日)  
 出演:アマリリ・ニッツァ、レナータ・ラマダン、ルチアーノ・ガンチ/マツミリアーノ・ピサピア、マルツィオ・ジョッシ/ファビオ・カピタヌッチ、他  
 指揮:イヴ・ケラー/サルヴァトーレ・ベルカッチオーロ  
 演出:ヴィヴィアン・A・ヒューイット
- 「トスカ」(7月24、30日)  
 出演:マリア・グレギーナ/リュドミラ・モナスティルスカ、ワルター・フラッコロ、ジョルジョ・スリアン、他  
 指揮:ピエル・ジョルジョ・ライモンディ/ファビオ・マストランジェロ  
 演出:ペッペ・デ・トマジ
- 「トゥーランドット」(7月31日、8月6、12、20日)  
 出演:マルティナ・セラフィン、イアン・ストーリー、ドナータ・ダヌツィオ・ロンバルディ/ミンマ・プリガンティ  
 指揮:吉田裕史/マウロ・ロヴェリ  
 演出:マウリツィオ・スカパッロ
- 「オペラ・ガラ・コンサート」(7月28日)  
 独唱:ルネ・フレミング  
 指揮:アルベルト・ヴェロネージ  
 演奏:ブッチーニ・フェスティバル管  
 ゲスト:アントニー・アルカーニ(14歳の作曲家・指揮者)

ブッチーニ・フェスティバル関連 Disk

「蝶々夫人」  
 出演:ダニエラ・デッシェ、ファビオ・アルミアート  
 ファン・ボンズ、ロッサーナ・リナルディ、他  
 指揮:ブランド・ドミンゴ  
 演奏:チッタ・リリカ管弦楽団&合唱団  
 ※2004年、ブッチーニ・フェスティバル公演  
 (コロムビア)COBO-4944 DVD

「蝶々夫人」(プレシア版)  
 出演:ダニエラ・デッシェ、ファビオ・アルミアート  
 ファン・ボンズ  
 指揮:アルベルト・ヴェロネージ  
 演奏:読売日本交響楽団  
 演出:ステファノ・モンティ  
 ※2004年、ブッチーニ・フェスティバルの日本での引越し公演  
 (コロムビア)COBO-4407 DVD

<http://www.puccinifestival.it/>

好評だった吉田裕史の「トゥーランドット」

今季、プログラムの最終(7月31日)として登場してきたのがブッチーニ、未完の大作「トゥーランドット」。作曲家が第3幕のリューのアリアのあと絶筆したため、残りのパートを弟子のアルファーノが補筆したものが演奏された。指揮台には、日本人としてはじめて本公演のブッチーニ作品を任された吉田裕史が上がった。

来年は日本の観点取り入れ、新たな「蝶々夫人」を上演

移りゆく心理描写には息を呑む。確固とした核の存在が周りにもたらす相乗効果は大きく、終演後、ほぼ満場の客席は沸き上がり、スタンディング・オーベーションがしばらくの間続くことになる。当日、会場を訪れていたシモネッタ・ブッチーニ(ブッチーニの孫)もマエストロによる演奏を高く評価している。

そして芸術監督であるアルベルト・ヴェロネージの手腕が高く評価されている。近郊、海沿いのバカンス地、ブッチーニゆかりの町でもあるヴィアレージョ市政との連携を組んで3370席にもおよぶ大劇場に聴衆を満たす条件が次第に整ってきた。

「少ない時間の中で充実した準備ができた」と自身が語るようにオーケストラと舞台上が円滑に絡み、演出の意図と音楽とがまったりとかみ合っていく。トゥーランドット役のマリティナ・セラフィン、リュウを演じたドナータ・ダンヌツィオ・ロンバルディが素晴らしい、とくにセラフィンの演じるプリンセスの

順風満帆と表向きは発表しているものの、イタリアの経済難、そして国からの文化予算の削減を受けた経営陣はずっと笑顔でいるわけにはいかない。しかし、苦境を前に足踏みするのではなく、さらなる前進を願った上で、企画そのものも充実させていきたいとモレットティは語る。

「日本との友好な関係は今後も膨らませていきます。来年は日本の観点により訂正を施した新しい形の『蝶々夫人』を同フェスティバルにて上演するつもりです」。また、フェスティバル・オーケストラの日本公演も視野に入れているという。ブッチーニの思いと、それに魅せられた人々の思いがまたひとつずつ現実になっていく。